LA DOLCE VITA

海とイタリアをこよなく愛し、ワイン、アート、マリン文化に深い造詣を持つ伊藤英一氏。
氏がこれまで体験してきた地中海のマリタイムの煌めきを中心に、海と食とボートに関わる彼らのライフスタイルを語る。

text & photo: Eiichi Ito

#09
イタリアの名門、Baglietto造船所

160年以上の歴史を紡ぐバリエット

1854年創業の「バリエット(Baglietto)」は、160年以上の歴史を紡ぐ世界的なイタリアの名門造船所だ。リグーリア海に面した街で創業したピエトロ・バリエットは、当初は木造の小さな釣り船を作っていたが、その後プレジャーボート建造へと転換する。

1900年代初頭にはイタリア初となる22.6mサイズの大型プレジャーボートを世に出すと同時に、早くもアルミハル艇の製造も開始した。第一次大戦頃には海軍から20tクラスの高速の対潜水艦魚雷艇を大量に受注している。イタリア海軍とはそれ以来の付き合いだと言う。レーシングボートではスピードの世界記録を樹立したりと、その世界でも躍進している。

1959年から1967年の間に製作され、当時イタリアでベストセラーとなった16mの「イスキア(Ischia)」は、僕が最も憧れたクルーザーだった。イスキアを知ったのは確か1970年代頃、地中海で見たマホガニー製の優美な船体と美しい内装に感激したのを今でもはっきりと覚えている。

その後も次々と大型のマホガニー艇を世に送り出し、世界の著名人から圧倒的な支持を得る。マホガニー製と言うとRivaがよく知られているが、小型のランナバウトでサイズも全て6mから10mサイズだったから、当時最大艇だった16mのバリエットが、世界の木造製プレジャーボートの黄金期を作ったと言っても過言ではないと思う。その後拠点をラ・スペツィアへ移し、スーパーヨットのトップビルダーとしての地位を順調に歩んで行くこととなった。

バリエットは20世紀後半の幾多の経済的不況を、数社の投資家によって支えられてきたが、2012年にイタリアのビッグカンパニーであるガヴィオ・グループの傘下に入る。イタリアの高速道路、鉄道、トンネル、ダム建設の最大手ファミリー企業を率いるガヴィオ氏はまずバリエットのヤードを一新すると同時に、イタリアのスーパーヨットビルダーのCCNとアメリカ のBertramも傘下に入れ話題となった。

紺と白の外壁が映える巨大なヤードのひとつ、イタリアンフラッグが誇らしく印されている。巨大な700トンクレーンが走行する様は圧巻。沿岸警備艇のBaglietto Navyのロゴとブルーの迷彩がカッコいい。

バリエット造船所訪問

昨年秋、長年訪問の機会を伺っていた新生バリエット造船所の訪問が漸く実現した。バリエットのあるラ・スペツィアはジェノバの東、リグーリア海に面した港湾都市で、イタリア海軍の重要な基地でもある。湾奥には多くの軍艦が係留されていた。軍需工場や造船所も多く、Rivaのスーパーヨット部門もバリエットから車でほんの数分の処にある。

造船所入り口のインターフォンで訪問を告げると、大きな門が音もなく開いた。オフィスで挨拶を交わした後、ヘルメットとベストを着用してヤードへと向かった。新生なったピカピカのヤードではフル操業で多くの作業員が働いていた。溶接の火花が散り、まるで竣工時の花火の輝きを浴びているようだった。生産中の艇は43m、46m、48m、55mのアルミとスティール製のシャフト艇セミ・ディスプレースメントだ。豪華ヨットの注文主はどんな人かと尋ねたら、イタリアと米国の財界人との答えだった。最近はロシアの顧客が減り、米国からの注文が増えているようだ。別のヤードでは50フィートクラスのアルミハル製RIBや、イタリア海軍用のウオータージェット艇が製造されたりと、バリエットの製造ノウハウの多彩さをつぶさに見る事が出来た。

ヤードから表に出ると、巨大な700tの自走式クレーンの容姿に圧倒された。タイヤだけでも人の高さの倍はあろうかと言う巨大さだ。オープンヤードで完成間近のアルミ製の船体やレストア中のスーパーヨット内部も見学させて貰った。

岸壁には最近就航して話題となった54mユニコーン(Unicorn)がスタン着けされていたりと、バリエット造船所ではまるで別世界が展開されている。まさにイタリアのスーパーヨットビルダーの底力を見た思いだった。 ***P.B.***

■ http://www.baglietto.com

Profile

伊藤英一

事業家。ボート歴は10代から既に半世紀以上。欧米の多くのリゾート地を訪れ、その土地の食やワイン、アート、音楽等に触れることを至上の喜びとしている。RIVAとRIBの熱烈な愛好家。